

軍港舞鶴の児童画

吉田 ちづゑ

はじめに

2001年6月8日、「舞鶴市明倫国民学校梅田学級児童画保存会」(代表者小森正弘。以下、梅田学級の絵・保存会とそれぞれ略記)から、立命館大学国際平和ミュージアムへ、約500点の児童画が寄贈された。この絵は、1939年に明倫小学校へ入学した一学級50名が、5年生終業の1944年3月までの5年間に、当時20代前半の担任教師、梅田作次郎(1918~95)の指導を受けて描いたものである。

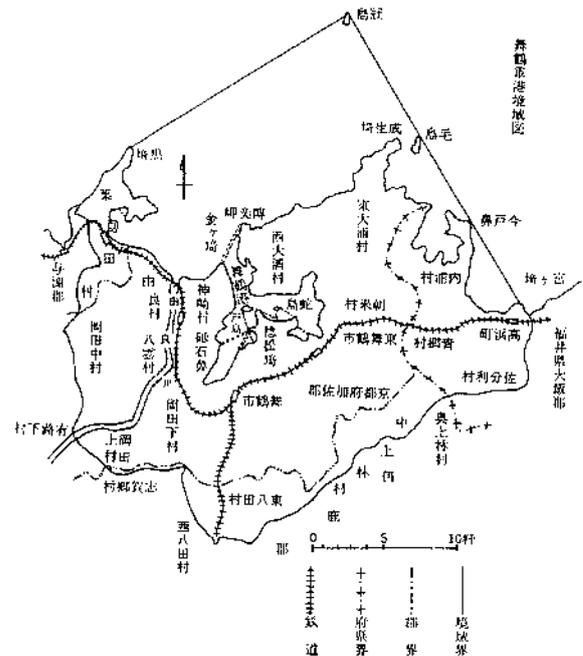
この5年間は15年戦争の後半期に当り、児童らが3年生になった1941年度には、小学校は国民学校と名が変わり、教科書も全面改訂された。教育改革は海外膨張政策が引き起こした大戦争を遂行するための国民統合政策のひとつであった。後年、国民学校の説明に必ず引用される、「国民学校令」第一条の「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と、同令「施行規則」に頻発する「錬成」がそれをよく表していよう。

「金属を溶かして練り鍛える」「鍛えて質をよくする」(角川大宇源)とした辞書の意味から考えれば、国民学校は児童の心身を鍛えなおす場、となる。当時の明倫国民学校日誌(以下、小学校、国民学校を通じて「学校日誌」と略記)にみえる、寒稽古、ストーヴなし週間、深夜登山、強行遠足、座禅、遠泳などは、すべて体を鍛え、忍耐力を養う行事であった。

梅田学級の絵はこの時代、つまり、大陸侵略戦争が中国から南アジア・太平洋へ拡大する中で、義務教育を通して国防貢献の意識涵養がはかられた時代の、図画教育の記録である。

梅田作次郎は1995年に没するまで、自作の木箱におさめて、この絵を保管していた。梅田の没後、舞鶴市内在住の教え子たちによる保存会がつくられ、保管を引き継いでいた。

本稿では第一章で梅田学級の絵の時代および地域的背景を、政治と教育の関連において検討する。すなわち、1872年の「学制」頒布以来、ほぼ一貫して忠君愛



舞鶴軍港境域図

(1939年、出典『舞鶴市史』通史編下P670)

国を教えた義務教育⁽¹⁾が、ファシズムが昂揚した15年戦争時代において、軍港地舞鶴ではどのような状態にあったのかを検討したい。それには、児童たちが育った1930年代の舞鶴の地域的状況と住民意識をみなければならぬ。鎮守府が「すべてにわたってこの地方を“支配”していた、ということも出来る」舞鶴⁽²⁾では、一般地域の人々に比べて時局への関心が高かったと思われる。たとえば軍縮(1922~32)に際しては、軍港が個人の経済に深くつながる事を体験した住民たちは、住民による補償請願や、鎮守府復活運動さえ行なっている⁽³⁾のである。

第二章では、梅田学級の絵を学年別に分析する。小学校と国民学校の図画教師用書を比較し、これらの指導と梅田学級の図画指導との対比である。分析の過程で、梅田学級の絵は、教育資料作成の目的で収集されたらしいこと、さらにその動機には2段階があることを推定するにいたった。その理由についてもこの章で触れた。

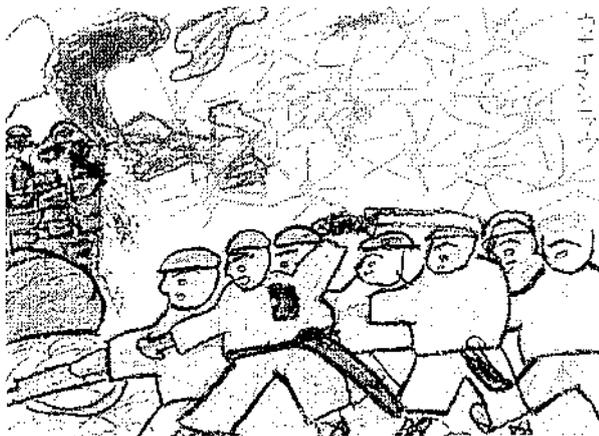
「おわりに」では、以上をまとめるとともに、梅田

学級の絵の歴史的・教育史的意義にも触れてみたい。

舞鶴と同じく軍都と呼ばれた富山市（陸軍歩兵第35連隊衛戍地）では、梅田学級の数年あとから（1942～48）親子絵日記が書かれている。この絵日記の自伝的研究書、小沢浩氏著『ヒロシ君と戦争』⁵⁴からは本稿考察に関して多くの示唆を受けた。

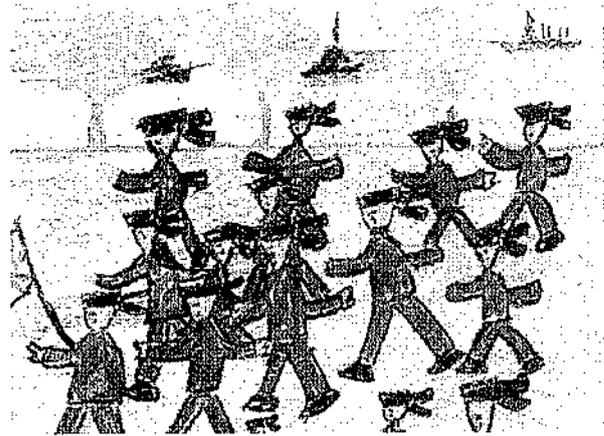
第一章 軍港舞鶴と児童の絵

梅田学級の絵で、とりわけ1年生男児には、戦闘場面と軍艦、飛行機が多い。たとえば、梅田が編集した画集のひとつ「一バンハヂメ・一バンヲハリ」は、入学時と3学期末の絵各1点が対比されているが、男児19名分の合計38点中、戦争以外の絵は6点しかなく、2点ともに戦争を描いていない子は1名にすぎない。



『舞鶴市明倫国民学校梅田学級児童画集』（以下図録と略記）
P11 戦争

『尋常小学图画』教師用書でも、「自分の知っていることは説明的に描き並べ、印象の深い部分を強調し、然らざる部分を省略する」1年生の特徴のあらわれである。地域的にも軍艦や戦争が多いのはうなづける。また日中戦争緒戦の戦果が華々しく伝えられたからか（後述するように、旗行列が盛んだった）、戦場が中国大陸らしいのも少年雑誌などの影響からであろう。しかし、私が梅田学級の絵から受けた最初の驚きは、絵に漲る強い覇気と、描かれた町の明るさのほうで、戦争画や全員の上手さよりも、ずっと強かった。電灯が灯る広い橋、提灯行列、颯爽と行進する水兵、晴れ着の子、お御輿担ぎの跳ねる足などなど。その威勢のよさと華やかさは力であり、それらは1939年頃の農村ではみられないものばかりであった。



図録 P8 水兵

その頃の農村は、ながく深刻な昭和農村恐慌から十分抜けでてはいなかった⁵⁵。だが私の関心は、恐慌の後遺症もさりながら、この絵にみえる舞鶴と農村との経済基盤の決定的な相違にあった。私の記憶にある当時の農村では、大人が2人寄ると、「つまらんなあ」といっていた。それが戦時統制経済からだけではなかったことを、今になって子供の絵から感じたのである。しかし、それでもなお、農村恐慌対策だった経済厚生指定村が、京都府内で最も多かった加佐郡内にありながら、舞鶴市の子供の絵にみられるこの活気は、奇妙に思われた。

上の2点の絵にみえる勢いは、すぐれた表現力にもよるが、基本的には町にある活気であろう。なぜなら、この活気は男女、巧拙にかかわらず、すべての絵に共通する特徴だからである。橋を渡る人、木登りの子供、裁縫の針をもつ手にいたるまで、すべてが休みなく動いているのである。軍艦、学校の跳び箱、靡く旗はいうまでもない。その、動いて止まない舞鶴とはどのような町なのか。農村に育った私は、梅田学級の絵、つまり〈知レルモノ〉として1年生が描いた町の活気から舞鶴という町に注目したのである。

では、その舞鶴とはいかなる町で、また、1939年頃はどのような状況にあったのだろうか。

以下、軍港設置によって急激に変容した住民の生活と環境の変化について考えてみたい。

1 舞鶴鎮守府の設置と住民

1889年5月28日、東舞鶴湾に鎮守府設置の勅令が出された。それから12年後の1901年に、日本海唯一の鎮守府が開庁し、同じ日に舞鶴海軍工廠も発足した。

開庁祝賀会は、11月3日の天長節があてられた。「舞鶴鎮守府司令長官東郷平八郎閣下ヨリ本校校長以下訓導以上ノモノニ対シテ案内」があった明倫小学校

は、京都府と地元舞鶴の有力者とともに、「甲部ニ列シテ厚キ響応ヲ受ケ」た。祝賀の2日間、学校は休みとなった。

新聞が伝える開庁祝賀の舞鶴は、「四五年以前に於ては、人煙稀少荊刺道を蔽いし所なりと云ふを聞くも逆も信ずる能はざる迄に変化し」、「数十本の煙火を打上げ」「碇泊軍艦は満艦飾をなして」「無数の電灯を点じ」、「広潤な府内も蟻の這ふが如き群衆は、押しつ、押されつ、なだれを打て雑踏を極めた」という。

「将来如何に膨脹するか知るべからず」と、この記者はのべている。つまり、住む人も疎らな僻地に出現した近代装備の軍港の威容は、夜の満艦飾だけにいっそう華やかに辺りを押し、その下の民衆が蟻のように小さくしかみえなかったのである。将来の「膨脹」とは、軍港の発展と、それに伴う周辺農村の変容のことに他ならなかった。

大日本帝国海軍近代化の柱とされた鎮守府設置は、明治新政府の急務であった。日本海沿岸の測量は1873年に始まり、1886年には舞鶴が終わっていた。その結果舞鶴湾は、「峻峙たる山岳が殆んど四面を連亘して、天賦兵備の要嶮を具備した良港」と評価された。52町歩強の軍港用地は、勅令までに買収が終っていたが、1895年にさらに28町歩を買い増し、日清戦争が終わったのち1897年3月、賠償金でようやく着工した。

鎮守府設置までの舞鶴は、西舞鶴湾を控えた旧城下町舞鶴町が、1889年の市町村制で唯一の町制を敷き、経済文化の中心であった。明倫小学校はこの舞鶴町を校区として、「学制」頒布翌年の1873年4月13日に旧田辺藩藩校の跡に、その建物を校舎として開校した。

開校6年後の1878年の明倫小学校には、加佐郡内43校の全児童数3327名の18%に相当する614名の児童が在籍していた。とくに、男子児童338名に対する女子児童数276名は、周辺農漁村の男女児童数の差に比べて著しい特徴がある。これは、第一に旧城下町の見識の高さによるものであろう。そのほか、当時の授業料父兄負担を考えると、商業地舞鶴の優位も、看過できないと思われる。「学制」頒布直後の舞鶴町周辺地域などの農漁村は、社会一般の男性優位思想に加えて、貧困や女兒の家事負担が、女子の就学率を低くしていた。

この児童数が調査された1878年の加佐郡の人口は5万5620人、そのうち舞鶴町は9198人で、郡内一の人口集中地域であった。やがて、圧倒的な経済効果をとともなう軍港設置によって、商業の町舞鶴町の経済的優位は崩れ、舞鶴全体にとっても大きな変化が起ることに

なる。

この地方に、「50万石の城下町に匹敵する」軍港設置の話が持ち上がったのはそれから10年後だった。しかも誰も予想に反して、東湾が軍港に指定されたのである。舞鶴町住民の落胆は大きく、東西間に深いしこりを残し、これがのちのちまで、海軍による住民統合の支障となったとさえいわれている。

他方、平穏な農漁村の東舞鶴地域の軍港設置該当地区には、「想像を絶する地元住民の負担」が強いられることになった。漁業の制約はもちろん、多数の農山林業住民には、幕藩時代と変わらない上意一方の用地買収と住居移転がいき渡された。住民側はただ、「地方百年ノ長計」のために、「自分持ニ関スルトキハ意見ヲ陳述スルコトヲ得ズ」とした契約書まで作って、地元有力者に万事を預けるしかなかった。無償の土地提供や、墓地と社寺どもの立退きの苦難などを『舞鶴市史』はなまなましく伝えている。

軍用地拡張は開庁後も続き、昭和に入ると西舞鶴地域へも伸びていった。用地買収方法は明治のそれと変わらず、1940年以後は、「陸海軍工作物管理使用令」の威力も加わった。軍用地買収の力から自分を守るすべは、明治、大正、昭和をとおして、住民にはなかったといってもよい。

この広大な軍港と軍港付属施設の建設は、農業中心の東舞鶴地域を急速に商工業地域へ変えていった。工場労働者や軍港要員の増加、それに依存する商業者の移入と軍都関連工事の盛況などで、海軍市街地として建設された新舞鶴町は、鎮守府設置5年後の1906年には、早くも戸数で西の舞鶴町と並んだ。さらに1920年の日本最初の国勢調査では、新舞鶴町と軍港近接の中舞鶴町との2町の合計人口3万4230人は、1万0393人の舞鶴町の3倍以上となった。軍港設置は明らかに東地域に近代的繁栄をもたらしつつあった。

2 大正軍縮から昭和の戦争時代へ

この中で、1922年7月3日、ワシントン体制による軍備縮小、すなわち舞鶴鎮守府は要港部へ降格、海軍工廠は工作部へ事業縮小（船舶建造は維持）が発表された。この軍縮は、直接には海軍軍人の減員と、海軍工廠労働者の解雇（1次から4次までの合計2772名）となり、間接的には、軍需公共事業の停止、商工業の衰弱としてあらわれた。軍需事業の停止は、すでにそれに依存していた経済を麻痺させたのであった。

軍縮は、西地域の投資家や商業にも、衝撃となった。トンネル開削や、道路工事、住宅建築などの起債は宙

に浮いた。¹²⁴第一次世界大戦後の世界的な平和指向と、日本国内の大正デモクラシーの高揚、軍事費削減で息をついた国家財政とは逆に、「軍港によって生まれ、軍港に頼って発展して来た新舞鶴、中舞鶴両町と周辺部落には、別に殖産興業とてもない現状に、今後どのように対処し、打開していくかが大きな課題となって覆いかぶさって来た」¹²⁵。さらに、「地方百年の長計」に殉じて軍港建設のために忍従した人々には、わずか20年後の突然の軍縮は、軍の裏切りとさえみえたのである。

加佐郡選出の京都府会議員水島彦一郎と岩田正雄は軍縮発表から5か月後の12月、「舞鶴軍港変革に伴う地方民救済ニ関スル意見書」を府会に提出した。両議員は、「奉公忠誠ノ美德ニ依テ従順ニ国策ニ服従シ醜キ争ヲ為サズ却テ海軍ヲ歓迎シ其事業ヲ翼賛シ今ヤ偏ニ其生命ヲ海軍ニ托スル迄ニ密接ノ関係ト為ツテ居ル」¹²⁶「忠良従順ナル国民」を、「激変ノ為ニ流離困感スルニ唯單ニ止ムヲ得ズトシテ座視」するようであれば、国家としては「余り勝手デ有リ又残酷ナル仕打」として、厳しく国を糾弾した。¹²⁷しかし海軍側からの救済はなかった。新舞鶴町と中舞鶴町は1923年1月に、「舞鶴軍港廃止に伴う地方善後ニ関スル建議案」をもって、第46帝国議会へ働きかけた。続いて2月には1366名の署名とともに「新舞鶴町救済金下附実施請願書」が、新舞鶴町有志によって貴族院と衆議院に提出された。ほかに、中舞鶴地主有志の救済請願もあった。運動は、さらに積極的な軍港復活運動へと発展した。西舞鶴も加わった復活請願は、日本海側の兵庫、鳥取、島根、福井、石川、富山、新潟など数県が参加し、日中戦争勃発の1937年まで続いた。¹²⁸

こうした軍縮対応の住民とは逆に、1922年頃から海軍は住民統合として町村合併を模索していた。地域連帯や、利益とはかならずしも一致しないこの合併に難色を示す町もあり、海軍はこの町に絶縁という制裁を仄めかし、町会議員が連名で海軍大臣へ陳謝・嘆願する一件さえ起きている。¹²⁹

合併はまず東西別々にすすめられ、日中戦争2年目の1938年8月に、舞鶴市と東舞鶴市の2市並立を実現させた。このとき、舞鶴町の人口2万6338人は、市制に必要な3万にとどかなかつたが、工場の誘致計画による人口増加を見越しての発進であった。¹³⁰

市制祝賀式で舞鶴市長は、「忠烈勇武ナル皇軍」に「感謝感激ノ極ミ」の我等は、「此際此時一層拳国一致堅忍持久銃後ノ護リヲ固クシ以テ聖戦ノ目的ヲ達成スベク一大覚悟」を披瀝した。このとき、東舞鶴市長には海軍軍人立花一が就任し、初の軍人市政となった。

海軍による住民統合はさらに進められていたことが、舞鶴鎮守府参謀長から海軍軍令部と海軍省軍務局長あて報告にみられる。その報告には、合併促進の方法として、京都府知事、市長、市議会の説得のほか、「新聞ヲ論ヲ動員シ」ともある。新聞は舞鶴でも、有力な世論動員の武器となっていたようである。

1943年4月の舞鶴市市議会で大舞鶴市合併の議案説明にあたった、水島市長は、「軍部ノ強イ要望ニヨリ国防ノ完璧ヲ期スル為ニ国策ニ順応シ」た合併であると述べ、また立花東舞鶴市長は、「総テヲ犠牲ニシ超越シテ全部ヲ府知事ニ白紙一任シタイ」と国防を第一としている。¹³¹こうして1943年5月に発足した大舞鶴市は、人口15万となり、市長には東舞鶴市長の立花一が就任し、名実ともに大軍都となった。合併を前に舞鶴市会は、地域的緊急重要急務事業として、「大軍都ヲ形成スベキ本市ノ立場」から「工業教育ヲ振興シテ戦力ノ増強」のため、高等工業学校を舞鶴に設置することを要望する決議を採択した。¹³²

鎮守府設置から大舞鶴市発足までの40年間に、海軍の支配力は東の軍港を起点に、加佐郡全域へと広がった。白紙に落ちた一滴のインキが、四方へ広がる形に似たその拡大は、満州事変勃発で一気に加速し拡大した。それにつれて舞鶴住民は、まさに「其生命ヲ海軍ニ托」した、「忠良従順」な住民にならざるを得なかったのである。¹³³

この従順さを培ったのは、まず幼少から忠良なる臣民へ教化した義務教育の方と、徴兵制度による報国精神強化が挙げられよう。それらは、近代化のように見えて、じつは明治政府が幕藩時代の絶対服従を制度化し、さらに徹底したものであった。

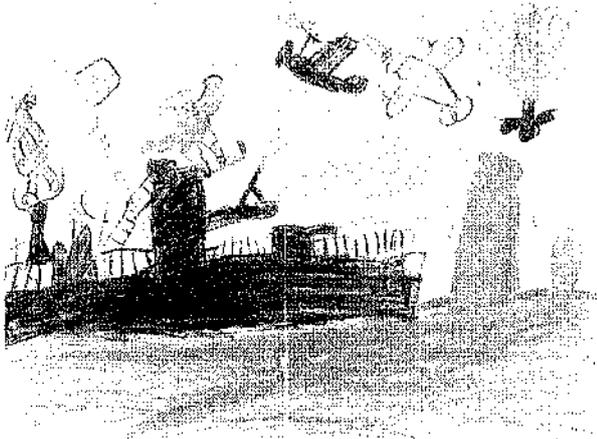
その従順がしみついた農村の東舞鶴に軍港がおかれたことは、国策敷衍をより容易に運ばせたと考えられる。とくに四面を山が囲む閉ざされた地形だけに、いっそう保守性が形成されたのであろう。舞鶴の人々はみずから「消極性」をいい、私も聞き取りをとおして、何人もの礼儀たたく、用心深い人たちに会ったことがいま強く印象に残っている。

この閉ざされた地形の中で、永らく封建勢力に従って生きてきた住民にとって、海軍もまた巻かれざるをえない力だったに違いない。¹³⁴とくに、軍需に生計を委ねる住民にとっては、突然の軍縮による経済不安は、狭い地域であるだけにいっそうあざやかに、海軍がもつ経済力を、認識させる事件であった。

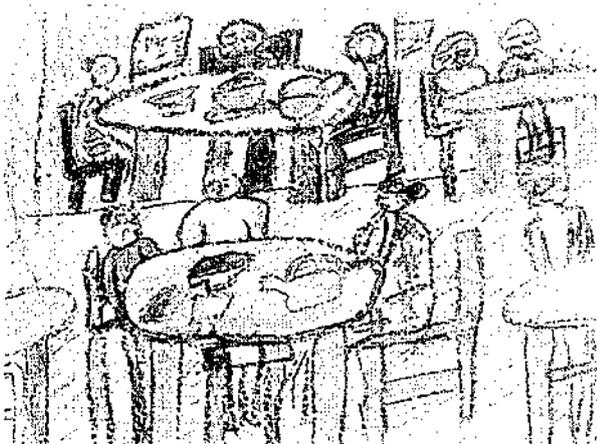
鎮守府開庁直後の日露戦争の勝利で、わが村の海に繋がれた捕獲ロシア軍艦を見て、強い海軍に熱狂した人々は、今度は軍縮を通じて個人の生活を左右する海軍の力を知る事になったのである。

したがって、1936年の海軍工廠の復活と1939年の鎮守府復活に際し、人々は「喜びにわき返り」町は連日祝賀パレードを繰り出してこれを祝福した⁽⁸⁹⁾のである。この2度の復活祝賀行事は、天皇の来訪や南京陥落の祝賀よりも、実質的に住民の経済と直結する出来事ではなかっただろう⁽⁹⁰⁾か。学校も挙げて祝った両復活のうち、鎮守府復活の年に1年生だった梅田学級児童は、そのまようを絵に描き残している。

1点はまさに軍国少年の海戦図で、この絵は軍港復活記念児童画展の2席に入選したものである。もう1点は祝賀行事で満員の洋食堂内の風景である。



図録 P21 海戦



図録 P28 食堂

勇ましい海戦は当時の少年の想像をかきたてた。その一方で、祝賀にわく町の洋食堂で両親と囲んだ料理を、より鮮やかに覚えていた子もいたのである。「好きなもの」を描けたおかげで、1年生の素直な心理がいきいきと絵に残されたのである。

戦争の激化とともに、舞鶴の人々は軍都住民としての、一途な海軍援護活動を展開する。日中戦争緒戦の1937年には4度の戦勝旗行列があった。1941年12月の真珠湾攻撃には海軍あての感謝電報を打ち、市の有力者揃って勝戦祈願の神社参拝、翌2月のシンガポール陥落祝賀旗行列など、どれも私の村にはなかった軍への協力行事が続いている。まさに、住民は軍港とともにあったようにみえる。

ちなみに、『舞鶴市史』に占める軍港関連記事の量は、通史編（中）では697頁中の311頁、同（下）では909頁中の148頁が割かれている。この頁数ですべてを判断できるわけではないが、少なくとも、舞鶴近代における軍港の位置を推測するひとつの資料ではあろう。さらに、『舞鶴市史』が各時代の各所に「学校日誌」を引用し、軍港と学校の関連行事を伝えている。軍港と学校の関係は鎮守府開庁が最初のものであるが、明倫校に関しては1897年秋に校庭が陸軍砲兵隊の教練のため共同使用となったことが、最初であるように思われる。明倫校は1905年に短艇部を創設し、海軍の指導を受けはじめて⁽⁹¹⁾いる。

開校以来明倫校は西地域だけではなく加佐郡、のちは舞鶴市の中心校としての役目を担ってきたことは、誰もの認めるところであった。

梅田作次郎は、東地域の朝来村で中学校まで育ち、京都師範学校を1938年3月に卒業し、陸軍福知山連隊で半年の短期現役兵を終了した。東・西舞鶴市が発足した1938年8月、生徒数2400名の明倫小学校へ赴任した青年教師梅田を迎えたのは、高等官6等待遇の実力者、大槻平治郎校長であった⁽⁹²⁾。

3 梅田学級時代の明倫校

梅田学級児童が入学した1939年に15年戦争は9年目に入っていた。

当時の舞鶴では、戦争の緊張はあったにせよ、海軍工廠復活以後の従業員の募集と、鎮守府復活による兵員の急増、西舞鶴湾大改修工事などで、空前の活況であったと思われる。たとえば復活当初は5000人だった海軍工廠工員は4万人に増加し、そのほとんどは市内から募集された。この軍需景気は町に活気を呼び、それが児童の絵の活気となったのだらうと思われる。事実「あの頃はよかったです」と、聞き取りで人々は話してくれた。子供たちは新しい橋や港へ入る大きな船はその活気の源のひとつであった⁽⁹³⁾。

では、その頃の学校生活を、「学校日誌」の記事からみてみよう。「学校日誌」は明治時代から保存されており、1897年からの陸軍砲兵隊との運動場共同使用や、初回の招魂祭、数々の旗行列、あるいは、年80回を超える年もあった出征帰還兵士送迎などが記録されている。下の表は、その「学校日誌」による、梅田学級入学の1939年度から5年生終業の1944年度までの5年間の行事である。恒例行事を中心とし、1年限りの皇紀2600年等は省いた。また、映画会などの月例行事は別に記した。

行事名 (備考)	実施日
☆氏神参拜	毎月1・15日
◎神武天皇祭	4月3日
☆学校創立記念日 (1873年創立)	4月13日
○舞鶴市招魂祭	4月中旬
☆遠足 (秋にもある)	4月
◎靖国神社春季臨時大祭 (遥拝式。10月には秋季臨時大祭)	4月25日
◎天長節(天皇誕生日) 拝賀式	4月29日
◎海軍記念日 (5年生以上、鎮守府の運動会に参加)	5月27日
☆修学旅行 (1943年は前年度の3月に)	5～6月
☆短艇(ボート) 漕練開始	6月
☆強行遠足	6月前後
◎興亜記念日 (1942年より支那事変記念日)	7月7日
☆遠泳検定会	7月
☆ラジオ体操会開始 (1942年より7月21日、夏休中実施)	8月1日
◎満州事変記念日	9月18日
◎神嘗祭	10月17日
☆運動会 (1942年より体錬大会)	10月
○朝代神社例祭	10月22日
◎教育勅語渙発記念日	10月30日
◎明治節 拝賀式	11月3日
◎国民精神作興ニ関スル詔書渙発記念日	11月10日
◎新嘗祭	11月23日
☆義士会	12月14日
◎大正天皇祭	12月25日
◎新年 拝賀式	1月1日

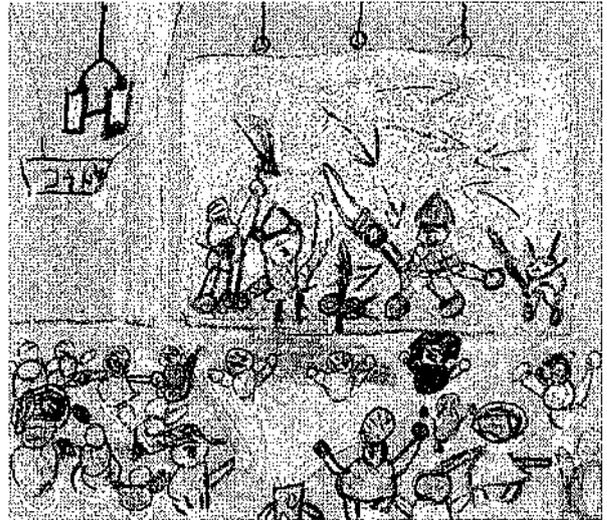
☆寒稽古 (主に剣道)	1月
◎紀元節 拝賀式	2月11日
☆学芸会	2月上旬
◎満州建国記念日	3月1日
☆雛祭 (舞鶴幼稚園の行事に参加)	3月3日前後
◎地久節(皇后誕生日)	3月6日
◎陸軍記念日	3月10日

注

◎=国家行事、○=地方行事、☆=学校行事

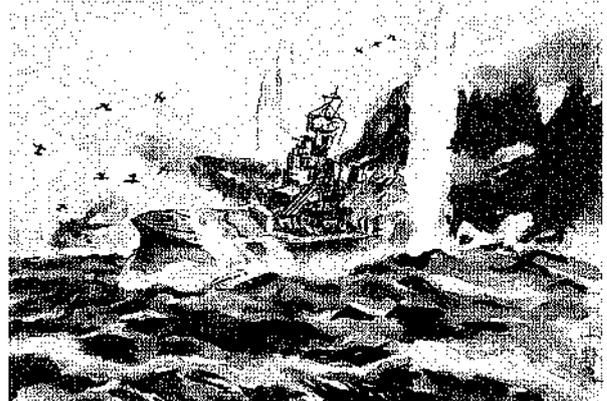
上記のほか、ほぼ毎月、講堂映画と時局講演会がある。毎月1日の興亜奉公日は、1942年1月より毎月8日の大詔奉戴日になる。

1940年4月に講堂に神棚が置かれ礼拝が始まるなど、1940年には「日本精神」教化事業の続出が見られる。



図録 P26 講堂映画会

出征兵士の送迎や、講堂が会場となる戦没者市葬には児童も参列した。陸海軍志願兵や満蒙開拓義勇兵の募集促進の講演会とその試験、そして軍人や新聞社の時局講演会も多く開かれ、高学年児童は参加した。



図録 P71 海戦

おとなと一緒に陸海軍支援行事に参加するほか、教室においても、支援行事は行なわれた。戦地への慰問文と市内の海軍病院への慰問画の制作があり、前頁の「海戦」はその1点である。具体的な精神教育もいくつか記録からみられる。楠父子がとくに忠義の鑑とされた時であり、「君達は昭和の正行である」と教えたことが、梅田自身の文章に残っている¹⁴⁰⁾。新聞紙を巻いて刀とし、「源平盛衰記」と名づけた騎馬戦ではみずから太鼓を打って励まし、「必ず勝った」とも書かれている。ある日、木刀を竹馬にして遊んでいた児童をみつけ、「武士の魂に足を掛けた不屈者！」と一喝、ついに校長が宥めにはいるまで木刀の立合を止めなかったことは、逸話となった。

芥川の「蜘蛛の糸」や、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」を、自分本位を戒める訓話として、学級で読みかかせている¹⁴²⁾。こうした数々の行事や教訓を通じて、梅田学級の児童は、「僕は必ず海軍に入ります」と先生に誓うようになっていった。全国民の殉国精神徹底が、15年戦争時代の特徴のひとつだが、軍港舞鶴ではそれが地域的要請でもあることは、先にのべた海軍主導の町村合併や、最終的には軍人市長の就任でも推察できよう。舞鶴にあって、ひとり学校だけが児童尊重を守ることは考えられなかったであろう。むしろ義務教育こそが、教育勅語に則り、率先報国の先頭に立った事を、「学校日誌」の行事の数々はみせている。そして実は、これらの行事に参加することが、児童の誇らしい時となることこそが、学校行事の目的だったともいえる。

では、その中で児童たちが描いた絵を、つぎにみていきたい。

第二章 梅田学級の絵

1 資料「梅田学級の絵」の誕生

総数500点の梅田学級の絵は、梅田私製の画集4冊のほかは、画題別に整理一括されていた。

画集は、1年生—「一年生の図画」—研究文つき—
「パンハヂメ・パンヲハリ」
4年生—「クレパスの頃」
5年生—「水彩画一年」

の計4冊がある。

そのほかに、1年生のみ共学だった女兒の70点と男児49点が、未整理のままにある。

画題別収集は、4年生—「あざみ」
5年生—「秋」・「武道」・「海戦」
「つゆくさ」

があり、下線の題は全員の作品が残されている。

1年生の2冊は、梅田が京都師範学校研究科に在学中（1944年4月～7月31日）に研究物としてまとめたものである。「一年生の図画」60点には、個々の絵に批評が与えられており、そこには1年生の特徴、あるいは作者の個性が書かれていて、図画教育現場の貴重な記録でもある。「一年生の図画」は、敗戦後数年間京都師範学校教授富士一雄によって、図画指導者講座に使われたと、梅田は書き残している。さらに梅田は「一年生の図画」の序文で、手元を集めたほかの図画も画集に編みたいと書いている。しかし、戦況は悪化し、研究科を卒業して軍港に近い朝来国民学校へ帰った梅田には、軍需工場へ動員された高等科児童の引率の日々が待っていた¹⁴¹⁾。ついに1945年3月、文部省は初等科を除く全授業の1年間停止を指示し、その5か月後に敗戦となった。

「終戦三十五周年 箱を作り記念品となし」と蓋の内側に書かれた日付の頃には、梅田の教壇生活は終わっていた。青年時代の情熱を結集したと思われる明倫梅田学級の5年間は、敗戦によって葬り去られたが、それだけになお、忘れられない年月であったと思われる。箱の蓋や研究文に書かれた「魂と魂の接触」、あるいは「守りつづけた五十余の魂」などの言葉には、郷愁よりはむしろ、自己の教育への強い自負が潜んでいるように思われる。

つぎにそうした日々から生まれた梅田学級の絵の、収集過程を考えたい。

まず1年生時代には、喜んでつぎつぎと児童が描く絵の、その創造力への感激が、収集の動機だったと思われる。それは新任教師の新鮮な情熱に発した個人的な意図だったように思われる。「パンハヂメ、パンヲハリ」は教師1年生の自分への評価でもあろう。

3年生は国民学校になった年であり、資料はとりわけ重要なはずだが、確認できるのは1点だけである。新教科書が発行されていないので、体系的な教育ができなかったにせよ、計画があれば収集したであろう¹⁴⁶⁾。しかし、1点の「千早城」は、忠臣権正成の戦いぶりを描く毛筆画であり、さらに国民学校が推進した「共同制作」でもある。

4年生以後は、教育資料を作る意図のもとに収集されたと考える。その理由として、①明倫校が国民学校教育指定校となったこと、②梅田は図画教師として、国民学校講習会に出席していること、③それ以後も、「学校日誌」には、学校内外の図画研修会や研究授業

に梅田の名がみえること、④梅田みずから絵を習っていること、があげられる。

このほか、2002年4月の舞鶴市での梅田学級児童画「特別展」会場で、貴重な話を聞くことができた。

文化財保護委員として、その家の屏風を鑑定したあと、梅田は、「屏風は、大切にしてくださいよ。じつは私もこの子供の絵を預かっているのですが、返すと散逸するので…」といったという。大多数の教え子と同じ舞鶴に住みながら、絵を返さなかった理由がここにあるように思う。じつは教え子たちは、かつて幾度も返却を求めたが、実現しなかったそうである。

たとえば、描かれて半世紀を経た500点の児童画ならば、その経過時間だけでも資料価値はある。さらに、それが描かれた1940年前後の時代と教育現場の証言者としての意味も持っている。そうした多様な価値と、教育に献身した自分の記録として、梅田は絵を整理し、箱を作って保管し続けたと、私は思う。

この梅田学級の絵を、梅田のまとめたとおりに1・2年生、3・4年生、5年生の3段階を追って、各時期の教科書の教師用書、あるいは、教科書編纂趣意の指示と、梅田学級の絵とを比較していきたい。

なお国民学校では、図画工作教科書の編纂趣意書発行にかえて、文部省図書監修角南元一による編纂趣意が放送された。本稿ではこの放送文を参考とした。

2 1・2年生—大きく、にぎやかに

梅田学級入学前年の1938年には、戦時国民統合を図る、「国家総動員法」⁶⁷⁾が公布された。それと同時に教育改革も進められていった。

舞鶴ではすでに海軍工廠が復活し、鎮守府の復活が確実とあって、市民には明るい年であった。しかし、軍需に活気があることは、とりも直さず戦争が終息へ向うのではなく、事態は深刻な方向へ向っていたのである。

1939年度入学の梅田学級児童は、明治以来続いてきた〈小学校〉の呼び名の、最後の2年間の児童となった。また1・2年生用として最初の図画教科書『尋常小学図画』もこの2年間で終ることになる。

1933年の第3次国語教科書は、俗にサクラ読本と呼ばれた、一部色刷りであった。図画教科書教師用書では、1年生の特質について、「物の大小遠近などには頓着せず、又往々見えるものを画き落したり、見えないものを画いたりする」と把握し、「絵を画いて盛んに思想を發表する」この年代には、「なるべく大きく、強く、のびのびと、豊かに画かしむべきである」と指

示している。「技巧よりも想を重んじ、美点を褒めて、喜んで画くやうに導くべきであ」り、児童の想いを十分に發表させるには、彼らの興味のままだに自由に描かせること、つまり、児童が自分の「好きなもの」を描けるように配慮されていた。

『尋常小学図画』1年生用には、「好きなもの」という題が4回と、「好きな景色」が1回ある。また、「夏休みの思い出」も絵にする機会がある。この方針は、児童が手本を見習うのではなく、自主的に想いを絵にすることにあった。この点は、国民学校での、「己れを空しくして従」⁶⁸⁾う図画教育とは基本的に異なり、児童の個性を大切にす指導であった。

西洋自由主義、個人主義への排撃が轟々と起こっていた1939年頃に、個人とか自由や個性を尊重する図画教育は貴重なことといわねばならない。思うにそれは、義務教育の図画への粘り強い批判と、文部省側の模索、そして民間運動の結果、ようやく到達した〈こどもの情操と個性〉の尊重を、不完全ながら実現した、戦前期の一瞬の曙光のような時期であった。

ここで図画教育史をすこし振り返っておきたい。

明治の図画教育は、富国強兵と殖産に寄与する技術の習得が目的であり、地図や設計図を描ける正確な線と形の修練であった。用具は鉛筆と筆で、色鉛筆を取り入れたのは、「学制」頒布後40年ほどを経た1910年である。その色鉛筆は、1932年まで20年間、色彩用具として続いた。

この20年間に、クレヨン⁶⁹⁾の国産と発売(1918年)、クレパスの国産(1926年)があり、民間人による史上最大の図画教育運動、「自由画運動」(1920年開始)⁷⁰⁾があった。山本鼎が長野県から発信した「自由画運動」は、「唯、生徒らの創造を愛する心」を究極の理念とし、子供の自由な表現を喜ぶものであり、子供がおとなの手本を模倣する、いわゆる「臨画」教育を批判した。「自由画運動」は、折からの大正デモクラシーの気運にのり、全国的な運動となった。『尋常小学図画』には、この運動影響があるといわれている。⁷¹⁾

軍国教育が進み、自由主義への弾圧が徹底しておこなわれ、教科書も軍事色となる時代でのこの英断は、1910年の図画教科書『新定画帖』⁷²⁾が、色彩として色鉛筆を採用し、低学年のみにせよ、〈記憶画〉を導入したことにつぐ、図画教育の革新であった。〈記憶画〉は、『尋常小学図画』では〈思想画〉といわれる、自由画のことである。

クレヨンは1932年から、つまり『尋常小学図画』か

ら採用された。梅田学級はクレヨン導入8年目の児童であった。

こうした中で、梅田学級児童は、戦時にもかかわらず、図画教育において最初の2年間を、先にみたように、「好きなもの」が描ける教育から出発できた幸運な児童であり、加えて熱心な担任教師にもめぐり会ったのである。

「大きく、強く、のびのびと、豊かに画かしむ」とする教科書の指示を、梅田学級では、「大きく、にぎやかに」、さらには「描きたいというときに」が加えられた。児童たちは教師へのメッセージとして、何でも絵に描き、児童のほうから「描きたい」とせがむまでになった。先の講堂映画（図録P26）は、映画会の直後にせがんで描いた絵だと、梅田の評文にある。

梅田の研究文によれば、1年生の絵のほとんどは、「好きなもの」の題によるという。まさにこの題のおかげで、彼らの家族、町、学校、講堂映画、海と船、先生、そして憧れの軍艦や水兵、さらには少年雑誌にあふれる〈戦果〉が描かれたのである。

児童たちは、「好きなもの」を描いては、先生に褒めてもらい、彼らはずんずんと絵が好きになっていった。国民学校では、「好きなもの」はまったくなくなるだけに、この2年間は、貴重な時間であった。

先に述べたように、「好きなもの」として1年生が描いた人々や風景は、活気と喜びにあふれており、それはまさに、1939年の舞鶴市民の状態だったとみてよいであろう。もちろん、町並や人々の服装、家具類、風景は、そのまま町の記録である。

そうした歴史的な視点とともに、教育学的な意味でも注目されるのが、画集「一バンハヂメ・一バンヲハリ」である。これは男児のみ19名の、入学直後と1年生の終わりの絵1点ずつが並べて貼られている。ほかに1年生だけ共学だった女児の分が編纂されないで2点ずつ残っている。ほかに未整理の男児分もあり、それらを合わせて46名分の2点ずつを対比することができた。

この46名からわかることは、つぎの6点である。

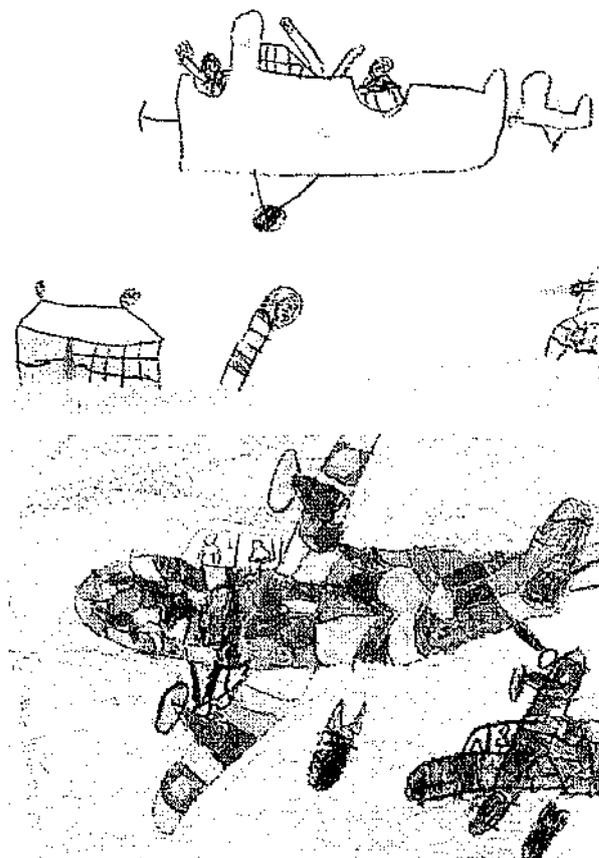
1. 入学当初はほとんど線画。形がとれない児童も多い。名前を中央に大きく書く児童が3割ほど。巧拙の差が大きい。
2. セリフが入り、漫画と区別のない絵もある。
3. 男児で2点ともに戦争を描かないのは2名。

4. 女児は入学当初9名が戦争や飛行機、軍人を描いたが、学年末には皆無となる。逆に男児は戦争が具体的かつ詳細で派手になる。
5. 男女ともに赤、青、茶、黄色の順に使用数が多く、赤は全員が使用する。
6. 3学期には数人であるが、意図的な混色ができる。

3学期には描きたいテーマが明確になり、構図が正確になる。使う色数が増え、画面に余白が少なくなる。下に男女別の平均使用色数の変化を示した。

	男児	女児
入学時	5、04	6、09
学年末	7、94	8、17

指導書では1年生のクレヨンは8色が指定されており、男女ともに指定数を使いこなしている。ただ、色の増加が、そのまま上達とは限らない。しかし構図が明確になると、色も多くなり進歩を感じさせる。下の2点の色数は2色しか差がなく、構図は単純化されて、描きたいことが詳しくなっている。



図録 P5 「一バンハヂメ・一バンヲハリ」

構図は、想像力と観察力の結晶と思われる。1年生の記憶力と想像力を刺激し、美的情操を啓発する教育を考える上で、「一バンハヂメ・一バンヲハリ」は、図画教育に限らず、多面的な示唆を与える画集ではないだろうか。この画集には、よく似た例が多数みられる。

2年生では男女別の学級編成となり、梅田学級は男子組となって、新たに25名の男児が加わった。梅田にとっても男子組は幸運だったようで、運動会の騎馬戦では、無敵だったことが「一年生の図画」に書かれている。ある調査によれば、入学児童と担任との年齢差は、12歳から20歳が理想であるという。その説に従えば、梅田学級はこの点でも幸運な学級であったといえよう。

3 3・4年生—「皇国ノ道」の図画へ

1941に発足の国民学校は、「具体的に忠良なる国民を錬成する為の芸能教育であり」、「抽象的な個人の人格形成とか自我の実現の為の教育ではない」として、「尋常小学図画」に見られたような、児童の個性伸張を認めた図画教育の趣意を厳しく否定した。文部省の角南監修官の説明によると、「造形美の創造が恰かも産業国防に貢献するが如き所に一路を求め、要は皇民錬成の一途に帰す」ことを目的とし、毛筆や模写の修練で日本精神を習得する事を柱に据えた。また、国防産業の技術獲得のための科学的学習の必要を説き、日本美術は「根本的には近代科学精神と一脈通ず」と、かなり強引な説明もみえる。⁽⁵⁴⁾ 科学知識習得は、当時の急務であった。⁽⁵⁵⁾

以下は角南が説明している、3年生以上の学年別、図工教育の日標を要約したものである。

《初等科の教育目標》

◆概要

- ◇色彩教育の強化＝産業・国防・日常生活の必要
(クレヨン色彩の規格統一・色彩用掛図で指導)
- ◇共同製作、時局的、奉仕的、国防的、日本人の科学的天稟の覚醒
- ◇写生重視＝観察眼の養成
- ◇工作＝機械化国防・高度産業の要求
共同製作は、個々の力が一人の力となる訓練

《初等科三年》

- 思想画—着想、構図は計画的、具案的に
- 写生画—中心になる過度期。精密に正確に、明暗・陰影の変化に注意、重色の指導、立体的表現へ

- 多角的表現力—毛筆、鉛筆での写生
- 臨画—毛筆表現の初歩的練習
- 観賞—日本の美の観賞(掛図使用)

《初等科四年》

- 描き方の客観性を進め、己れを空しうして従う訓練。2時限続きの授業で、後半は反省と追求にあてる。
- 写生画—質感の描写へ。写生画中心の時代。
- 思想画—国民生活に拡める。郷土、産業を描く。
- 工作—国防兵器の教育 cf グライダー組立

《初等科五年》

- 思想画—「剣道」＝精神性と動的表現
「行軍」＝地味で重要な苦勞の場面
- 写生画—分析的、一面の抽象。精密。省略と速写。
近、中、遠景の把握
- 日本的—毛筆による模写と臨画

以上の学年別図工教育の段階的な指導を、文部省は科学的であるとした。必要な到達度を修業年数に割り振った、職業訓練的方法ともみえる課題である。質感、速写、模写、毛筆画は、私は習わなかった技術である。文部省が指示する技術は、とくに日本画の省略と速写の難度が高いため、角南も「極めて奥行の深い高次の技法であるから、指導にはよほど力を要する」ことを認めている。しかし、「力を要する」のは日本画だけに限らない。写生に要求されている技術は、決して易しいとはいえない。授業では教師が模範を示す必要があったと思われる。「梅田先生はみんなを見てまわりながら、ほいと後から線を一本入れてくれる。そうすると、絵がいったんようになった」⁽⁵⁶⁾ そうである。この思い出話からは、梅田学級の授業風景がみえてくる。まさに、指導者が細かな技法の習得者であった。

3年生以後の梅田の指導は、資料が少なく、ほとんどわからないが、毛筆が必修となっても、すぐに絵巻の共同制作ができる段階にはきていたようである。

3年生の作品と確認できる絵は、共同制作「千早城」ただ1点である。教材不足が進んだ頃で藁半紙半分ずつの粗末な用紙であるが、絵にはセリフも入り楽しそうに細かく描かれている。興味深いのは、いくつかの場面が重複することで、そこは柴守備に正成が知将ぶりを発揮する場で、いわゆる岩石落とし、火の矢降らしなど、講談の聞かせどころでもある。子供でも聞けば忘れないで、創作意欲をかきたてるところに、文学

の測りしれない力を感じる。この「千早城」絵巻は、共同制作、毛筆使用、歴史上の偉人物語による教化など、文部省が推進する日本精神、皇軍扶翼の臣道教育に最適の課題であった⁴⁷⁷。1点ではあるが、国民学校教育の象徴ともいえる作品であり、さらには南朝の熱烈な信奉者だったと聞く梅田には残したい一点であったと思われる。

4年生の絵の特徴は、クレヨンとクレパスの重色のバリエーションを駆使した写生にあるといえる。必修だった毛筆画は1点も残されていない。4年生の画集が「クレパスの頃」と名付けられているとおり、この学級は文部省の要求する写生技術、とくに重色に臨んだ。クレヨンとの重色が効果を発揮し、すべての絵は、技術の手本というべき秀作が揃っている。たとえば下の2点は、質感、明暗、陰影の課題と思われる。ユリは背景の青の重色で花の新鮮さを強調している。多宝塔は建物、とくに屋根と廂の複雑な重色と、写生位置の妙により、堂々とした量感で表現しえている。塔の左の曲がった古木の効果も見落とせない。いずれも課題をなした梅田学級の自信作と思われる。



図録 P49 百合



図録 P50 塔

写生は国民学校の最重点課題であったが、3年生では形の正確な把握から始まり、5年生では質感の表現に加えて正確な速写も要求された。前頁の表にみるとおり、国防教育がいかにも貪欲に、〈技術習得〉を急かせたか、また、梅田学級がその要求によく応えていたかは、4年生の絵で十分うかがうことができよう。

二重三重の重色、その重色を竹べらで削る、あるいは指でのばすなどさまざまな技法は、梅田の探究心と熱意なくしては不可能であったに違いない。児童にとっても、自分で考えつくようなやさしい技術ではないが、教えられるこの魔法のようなクレパス画に夢中になり、ますます図画が好きになったという。クレパス画への彼らの熱中ぶりは、5年生水彩画「秋」の教案の中で、「自分で勝手に描いてくる絵はみなクレパスである」と梅田が書いたほどであった。

また、4年生からは2時限続きの図画の授業になり、後半は「反省と追求」が課せられた。2時限と昼食をつなぐ外出は、児童の最大の楽しみであったという。

クレパス画では、唯一、課題「あざみ」が全員分残されている。日本の自然美を画題として、全員が同じ対象を写生する、つまり、「己を空しうして従」う訓練の課題のひとつと思われる。児童の作品には、標本そっくりの精密写生、多少人雑把だが魅力的な「あざ

み」までさまざまである。この多様さが、改めて絵の本質を考えさせるけれども、主観排除、日本精神涵養が目的の国民学校の図画教育は、5年生になると日本画と模写が加わる。

4 5年生 はみ出さぬやうに

5年生では、全員分の写生水彩画「秋」、毛筆画「武道」、毛筆臨画「つゆくさ」が残された。これらにクレパスの「あざみ」と、クレヨンの2冊の画集を加えると全学年、全画材の絵が揃うことになる。

全部を通してみたとき1年生初期を除く、梅田学級の絵の特徴は、よく整っていること、いわゆる、行儀のよさである。これは徹底した構図指導によるものと思われる。臨画は別として、個人差があらわれるはずの風景写生「秋」においても、巧拙はあるがはみ出した絵や個性的な着眼の絵はみられない。これには、梅田学級独自の構図指導の秘密があった。

聞き取りによる、写生「秋」での指導はつぎの順序である。まず、はがきの外側1センチほどを残して切り抜き、見取り枠を作る。その枠内に、遠景、中景、近景がそろって入る場所を選び、鉛筆でデッサンする。A4画用紙には4点のはがき大のデッサンが入る。このデッサンの中から梅田がよしとしたものを、改めて本画にするそうである。この構図指導の結果、「秋」の景色はすべて同じ大きさとなっている。ここには「大きく、にぎやかに」で育った個性と活気はほとんどなくなり、全員が同じような絵を描いている。

そのかわりこの徹底した構図指導は、毛筆臨画「つゆくさ」や錦絵の模写では効果を発揮している。全員甲乙なく揃った「つゆくさ」をみると、明治以来の殖産のための図画が、臨画ををもっぱらにしたわけが解ってくる。設計図や地図や工芸品をいかに正確に、かつ美しく描くかを要求した時代が、手本そっくりに描く臨画修練を第一としたのであった。そして、国防産業の技術習得が急務となった国民学校の図画教育は臨画と模写を復活推進させたのである。児童の自由な思想表現を尊び、臨画が退けられてから、国民学校までは、わずか9年しか経っていない。

臨画と模写は、高度な技術習得に必須の方法といわれるが、それは「己れを捨てて従」うことが要求される国民学校が何よりも要求したものであろう。

梅田はこの高度な課題を果すために、俳句や和歌を導入したり、花押の篆書を教えるなど、5年生児童の知識欲と興味を満たすように、さまざまな材料を駆使

して、課題実現のために情熱を注いでいることがわかる。この成果としては、子供の手とは思えない模写、「宇治川の合戦」がある。

それにもかかわらず、「秋」や「武道」の画一的な描き方からは、児童たちが「好きなもの」でみせた闊達さ、個の思想としての絵をもう忘れてしまったのだろうかという疑問を起こさせる。

そのほかに、わずかではあるが、作者の思想が背後に見える絵をみつけることができる。その思想は、描く対象への作者の没入の深さではないだろうか。これらの絵は臨画ではなく、あくまで創作であるところが重要であり、その点で私が感銘した絵である。

まず1点は水彩の「ダリア」である。厚みを感じるダリアは、綿密に描くと重苦しい絵となりかねない。しかしこの絵では、上の花びらに下の花びらが透ける程度の淡彩で仕上げられて成功している。透けないダリアの花びらが透けている意外な表現が、逆に夏の早朝だけの貴重な涼しさを、見る人に感じさせるのではないだろうか。この絵は、課題画「夏の花」と思われるが、模写ではなく、作者の感じの方が、静かだが強く見える作品である。



図録 P57 ダリア



図録 P62 行軍

つぎの「行軍」は兵士の苦勞を認識させる目的の課題で描かれた絵であるが、上のダリアと同じく、作者の技術ではなく、内面の深さを感じる絵ではないだろうか。全員が軍服に同じ型の背嚢を背負い、銃を担ぎ、ゲートルで足を固めた兵士たちは、S字状の山道を登っている。手前では左半身を、つぎに背中を、やがて右半身をみせて画面から消える。確かに1列の兵士の行軍であるが、まるで1人の兵士の歩いた軌跡ともみえる。それ程にこの絵の兵士たちは、みな同じである。軍隊の統率により、人は無表情で機械の如く動く、1940年に、従軍画家の野田三造は書いた。

この絵には人を惹きつける力があるらしく、「特別展」では多くの人の足を止めた。作者によると、満州にいた兄の手紙に、「背嚢を背負って山道を登る」とあったので、その行軍を思っで描いたという。つまりこの絵には作者の具体的な思いがこもっていたのである。戦時中の5年生が課題で描いたこの2点が、60年を経たいまも、人々を惹きつけるのは、心の表象としての絵画という、普遍性を具えているからであろう。

おわりに

梅田学級の図画教育は、大正時代の「自由画運動」の影響をうけたといわれる「尋常小学図画」を教科書としてはじまり、それが2年生まで続いた。師範学校卒業直後の担任教師梅田は、この教科書の指示を忠実に体現した。その熱心な取り組みが、児童個々もつ豊かな表現力を育てた。

1年生の絵にみられるのは、児童が描きたい時に描いた絵にこそ、再現できない活気があること、同じ課題（たとえば桃太郎）で描いても、ひとりひとりの

絵が同じにならないことである。「大きく、にぎやか」な絵をほめ、「好きなもの」を「描きたい時に」描かせてくれる先生のもとで、絵が好きになり、日にみえて上達した。児童たちは、「知っていることを全部描く」、「関心の強いものを大きく描く」などの共通の特質をみせながらも、誰1人として、同じ馬、同じ軍艦を描かず、同じ「桃太郎」の話からも、3人3様の鬼ヶ島を描いた。

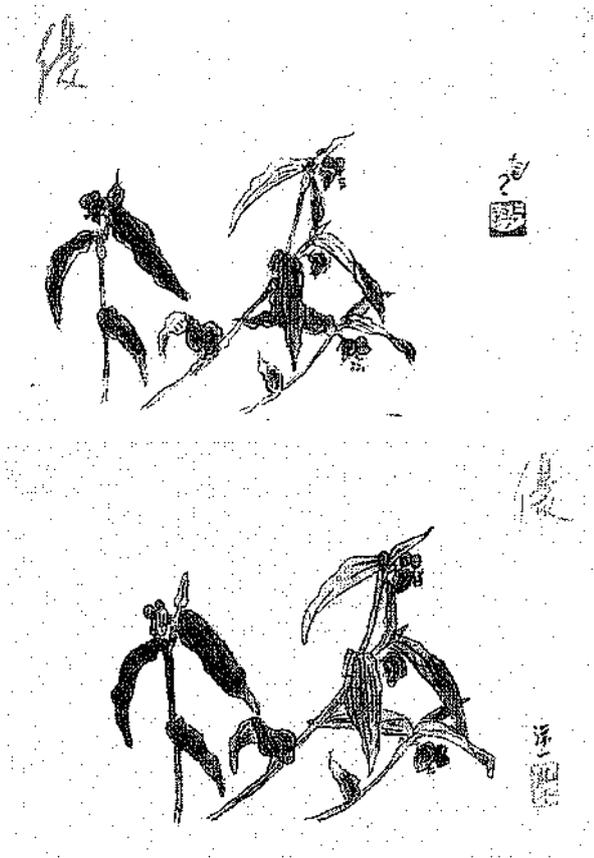
3年生からの国民学校の図画教育は、写生、共同制作、色彩訓練、臨画などにより国防産業に役立つ技術者の錬成を目的とした。たとえば写生は「己れを空しうして従」う訓練として位置付けられた。明治以来の国策図画教育への逆戻りであった。

国民学校図画への過渡期の絵は、3年生の共同制作「千早城」と、4年生の写生「あざみ」である。先にも述べたように、「千早城」には国民学校図画教育の特徴が集まっている。「あざみ」は、全員が同じものを描いた屋内写生で、構図に画一化がみえる一方で、花の印象と色づかい（花も紫、赤、ピンク、白）にはなお個人差があり、過渡期の特徴を残している。のちの5年生での「武道」と「秋」の無表情な絵に比べると、単調なはずの「あざみ」のほうに、なおめいめいの個性がある。「あざみ」は、全員が同じ方法で同じものを描くことで、失われゆく個性をみせている、いわば入口の絵であろう。

「あざみ」以降、梅田学級は「図画学級」と呼ばれるほど、クレパス画へ没頭する。梅田はこの時期に、クレヨンとクレパスの併用により、教科書が要求する以上の技法を児童たちに教えている。科学的と名付けられた文部省の課題は、文部省自身が認める高度なものだったが、梅田はこれに真剣に取り組んでいる。その成果として、指定の到達点を超えていると思われる秀作の1点ずつが残された。この、1課題1点ずつの秀作の収集を、私は梅田の意図的な収集のはじまりとしたい。またこの時期に、梅田自身も絵を習っていたと考えている。数色の重色を指でのばしたり、竹べらで削る技法や、白や緑の太い線による輪郭強調は、児童の工夫とは考えがたい。すべて梅田がもつ技法の伝授と思われる。

5年生では毛筆と水彩絵具が画材となる。淡泊で無表情な絵になりやすい、この画材の性質が、日本精神に通じるとして推奨された。1年生から毛筆を教えられていた梅田学級では、5年生ともなると筆によく慣れて、臨画や模写では高い水準に到っていた。ことに細くよどみない線が命と思われる臨画「つゆくさ」に

は梅田学級の特徴がよく表れている。



図録 P80 つゆくさ

5年生の印象は、訓練の行き届いた、高い表現技術を習得した、模範的な学級ということが出来る。「つゆくさ」でみられるように、ほぼ全員の技術が揃ってここまで上達した事実は、図画教育にひとつの教材提供となるだろう。たとえば、その修練の成果や指導の効果に感嘆するとともに、日本の図画教育がなぜ臨画を中心としたのか、その逆に、なぜ臨画が批判され続けたのかを考えさせられる。

以上をさらに要約すれば、梅田学級は1・2年生時代においては、児童の成長にあわせた、人間科学的方法の図画教育をうけたが、3年生以後の国民学校では、科学を標榜しつつ、もっぱら国防産業の技術を、職業訓練的に修練したといえそうである。

偶然に1学級がくぐった2つの相反する時代を、梅田の図画教育は、教科書の要求に忠実だった。教科書の指示に従い、教師に期待された以上の技術指導を行なっている。1年生末の児童らがみせた構図の進歩と色の使用の多彩さは、この指導なしには生まれなかったであろう。ことに、1年生の絵の発するにぎやかさは、子供たちには描きたいことがいっぱいあり、褒め

てくれる先生にそれをみせたくて、描いたからである。

ただ1点、梅田の指導に疑問を持つのは、構図指導である。高学年にいくほど、その特徴がはっきりする。よくいえば整った絵になるが、反対に、1年生時代がみせた深刺たる個性を次第に削いで、全員を同じような絵にしてもいる。構図指導が効果を発揮したのは、4年生の写生までではないだろうか。この時点までなら、児童たちはさらに秀作を残したであろうと思う。しかし構図こそが、国民学校の課題であり、「大きく、にぎやかに」とは正反対に、全員が一色となる練成であった。

梅田作次郎の終生の信条は「教師は聖職である」にあったと、家族や同僚は語っている。初任校の明倫校では、「子供達の魂に喰ひこんだ」と自認できる指導をした。図画だけではなく、教科すべてに真剣であったことは、木刀事件でも察せられる。比較的自由であった1・2年生の図画教育においても、3年生以後の職業訓練的な教育においても、ひたすら教科書の指示を忠実に実行した。それは初代文部大臣森有礼が願った、「教育の僧侶」⁽⁶⁾ぶりそのものであったといえよう。

その真摯さが、500点の絵を残させたといえる。さらにはその真摯さが、小学校および、国民学校それぞれの時代の特徴がみえる資料を生んだのである。軍部における国策第一の市政は、海軍が進めた舞鶴地方統合の経過や、1943年の合併以後の軍人市政にみられる。教育もその例外にはおかれなかったに違いない。

この結果、我々は、相反する2つの時代の図画教育への教師の対応をみ、その教育の結果である児童画の変化をみることができる。

《注》

- 1 「学制」の頒布は1972年8月
①義務教育制度 ②立身 ③自主(学費自己負担を原則とし、「頑愚無知」を無くし、「朝旨」に感激発奮する国民の育成を目的とした。
1890年の「教育ニ関スル勅語」で、教育の目的を、「一具緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天誦無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と具体的に指示。以後、神国思想と皇運扶翼が、教育はもとより、国民の思想と行動の規範なり、無限の拘束力を持った。
- 2 『舞鶴市史』(以下『市史』と略記)通史編(中)P520
- 3 『市史』通史編(下)P11~34
海軍工廠については同P37~46
戸祭武「大正軍縮と舞鶴」(上)『舞鶴工業専門学校紀要』

- 第20号 (1985) にも詳しい。
- 4 小沢浩・小沢梅子『ヒロシ君と戦争』(桂書房、1998)
- 5 第一次世界大戦後、アメリカに起こった経済恐慌が日本に波及し、経済基盤が最も弱い農村を直撃した。籾価 (27.4%) 米価 (49.2%) に暴落
- 6 『市史』通史編 (下) P370 1932年～35年までの、京都府下指定村は127村。加佐郡は12村で最も多い。猪俣津南雄『窮乏の農村』(岩波文庫、1982) とくに中編「農民から見た農村対策」P105～152
- 7 『明倫小学校学校日誌』(以下「学校日誌」と略記) 1901年10月28日・11月3日記事および『市史』通史編 (中) P515
- 8 『市史』通史編 (中) P509～514
- 9 「鎮守府配置ノ理由及目的」、伊藤博文『秘書類編纂 兵政関係資料』(明治百年史叢書119、原書房) P12～16所収
- 10 有栖川高熾陸軍大将から西郷従道海軍大臣への推薦状の一部。『市史』通史編 (中) P417
- 11 『市史』通史編 (中) P399
- 12 西地区神崎村は男95人女3人。明倫の隣の倉谷でも男54人女13人である。(『京都府誌明治11年』)
- 13 農家の場合は、現金収入がなく、また収入も少ない。授業料1月50銭。明治5年の米価1石4円9銭。子女は家事労働の担い手でもあった。
- 14 『京都府誌』による。
- 15 戸祭武『舞鶴における近代都市の形成』『舞鶴工業専門学校紀要』第14号 (1979) P136
- 16 『市史』通史編 (中) P627
前掲戸祭論文『舞鶴における近代都市の形成』にも詳しい。
- 17 『市史』通史編 (中) P611～613
- 18 『市史』通史編 (下) P710～737
- 19 『市史』通史編 (下) P11～46
前掲戸祭論文「大正軍縮と舞鶴」(下)
- 20 1921年度京都府の調査によれば、舞鶴町は公共事業への投資などで10万円の赤字決算。公共事業は海軍の要請によるトンネル開削工事などである。財政問題で町長が辞職する騒ぎもあった。10万円は町の5年間の経費額。
- 21 軍事費 (大蔵省昭和財政史編纂室編『昭和財政史』臨時軍事費) より作成)
- | | | | |
|------|-------|----|-------|
| 1921 | 41.9% | 28 | 28.5% |
| 22 | 45.5% | 29 | 27.1% |
| 23 | 34.1% | 30 | 28.5% |
| 24 | 30.0% | 31 | 31.2% |
| 25 | 29.3% | 32 | 35.9% |
| 26 | 27.7% | 33 | 37.9% |
| 27 | 28.0% | 34 | 44.0% |
- 22 『市史』通史編 (下) P18
- 23 『市史』通史編 (下) P20～21
- 24 『市史』通史編 (下) P22～24およびP656～666
- 25 『市史』通史編 (下) P504～506
防衛庁戦史室にこの嘆願書が保管されていた。
- 26 『市史』通史編 (下) P494
- 27 『市史』通史編 (下) P502
- 28 『市史』通史編 (下) P563
- 29 『市史』通史編 (下) P598～601
- 30 前掲注23、水島彦一郎らによる京都府会提出の「舞鶴軍港変革ニ伴フ地方民救済ニ関スル意見書」の文。
- 31 『市史』通史編 (中) は、軍港設置による住民の犠牲に頁をさいている。
『市史』通史編 (下) P323～335には、海軍に対する唯一の抵抗運動として、1933年の山本文顕による雄島 (冠島) の所有権訴訟をあげている。
- 32 『市史』通史編 (中) P551、555。
『学校日誌』1905年5月30日、6月1日
- 33 『市史』通史編 (下) P673
- 34 昭和天皇来訪は1933年10月30日、南京陥落は1937年12月。いずれも旗行列があった。
- 35 1937年は、保定陥落、上海戦捷、日独伊防共協定、南京陥落の4回の提灯行列があった。『市史』通史編 (下) P626
真珠湾攻撃への感謝電報は『市史』通史編 (下) P685～686
シンガポール陥落などの戦捷祝賀は2月18日、3月12日、『学校日誌』記事による。
- 36 練習開始日は、1939年からは、6月1日から、4年生以上男児が参加。
- 37 1935年度から1943年度まで明倫校校長。1938年3月、高等官6等待遇。1943年1月、高等官5等待遇。1943年2月軍事保護院総裁賞受賞。満州教育視察。
- 38 「児童ハ見ルモノヲ描カズ、知ルモノヲ描ク」は、梅田研究文中に引用されている文言。
- 39 運動場一件は1897年11月17日
鎮魂祭は1902年初出。この時は職員臨時。
- 40 出征兵見送りの「学校日誌」初出は、1906年12月1日。舞鶴要塞砲兵隊人隊兵。午前7時。
時局講演会などへの高学年の参加の一例として、1941年10月14日、海軍志願兵募集講演会 (市公会堂) に、6年生以上が参加の記事がある。
- 41 画集「一年生の図画」の1枚に付けられた評の文。この言葉は、聞き取り調査でも数人から聞いた。
- 42 2001年6月7日、聞き取り調査による。
特に「レ・ミゼラブル」は、感銘を与えたという。
- 43 1944年、教え子から梅田への手紙文の一節。
「一年生の図画」Tの評にある。
- 44 終戦35周年記念日に梅田は箱を作り、教え子の絵を納めた。この箱の蓋の裏に書いた文および戦後の手記の、「第三次薬廠に動員」に見られる。
1943年6月の「学徒戦時動員体制確立要項」、1944年1月

- は「緊急学徒動員方策要項」、同年 3 月には「決戦非常措置要項ニ基ク学徒動員実施要項」へと、法令も万策尽きた感がある。国民学校の朝来と敷島の 2 校が動員され、徒歩で動員先まで通う毎日だった。明倫校でも、初等科が箱作りに動員されている。
- 45 梅田は 1975～76 年度の明倫校校長を最後に退職した。のち、文化財保護委員。最晩年に、市内某家の屏風を鑑定し、その家で児童の絵を保存している事を話した。1994 年の事である。
- 46 「エノホン」初等科 1 年教科書は 1941 年、3 年用は 1942 年に出版。梅田学級は教科書なし。
- 47 1938 年 4 月 1 日公布。日中戦争長期化に伴う国防目的達成のため、人的物的資源の統制運用の権限を政府に委任する法。軍事目的のみに、勅令による各種統制、動員が可能となる。同年 6 月の「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」を始めとして、学徒の勤労働員、就学年数短縮など学生生徒児童すべてがこの法の支配下におかれた。
- 48 1 年生の教師用書では、〈第一学年の指導要領〉として 2 頁弱の文章がある。
- 49 国民学校初等科 5 年生の図工教育の目的。角南元一監修官の趣意説明文による。
- 50 クレヨン国産化—1918 年王様商會が発売
クレパス国産化—1926 年サクラクレパス
- 51 1919 年 4 月、長野県小県郡から発信した、児童の個性を尊重する図画教育。山本鼎 (1882～1946) によって提唱された。日本の図画教育における、日本画対洋画の対立、鉛筆対毛筆の用具論争など、子供を圏外においた論争の中で、子供の内面に目を向け、子供の思想を尊重した画期的な提唱。「自由画」「思想画」の言葉ができる。
- 52 中新編「近代日本教科書教授法資料集成」第 10 巻 (東京書籍、1983) 所収、上野清道の「総説」
- 53 図画の国定教科書ではもっとも長期間の 22 年間使用された。教師用書が重視され、鉛筆と毛筆をともに使用したほか、低学年から色鉛筆を導入。高学年の「写生画」に対し、低学年の「記憶画」を導入し、これが思想画へと受け継がれる。小山正太郎、白浜徹らの画期的な改革といわれる。
- 54 国民学校図画教育の趣旨は、中新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編「近代日本教科書教授法資料集成」第 12 巻 (東京書籍、1983) 所収、「編纂趣意書 2」、「芸能科」「ウタノホン」「テホン」「エノホン」編纂趣旨」(文部省図書監修官 角南元一) から引用。
- 55 義務教育での科学の教育の必要は、日露戦争後から、とく

- に陸軍でいざされ、大正デモクラシー期からは、軍紀肅正の意味も加わって、強く叫ばれるようになった。(浅野和生「大正デモクラシーと陸軍」関東学園大学、1994)
- 「歩兵デモ色々通信機トカ或ハ距離ヲ測定シタリ各種ノ器材ガ加ッテ来テ」(1935) 橋本陸軍次官の談話。(石井均「国家主義体制下の教育」『日本教育史』ミネルヴァ書房、1993、所収)
- 久保義三「国民学校教育における矛盾の諸相」『日本教育史』第 4 巻現代Ⅱ (創風社、1984) 所収。
- 神話による宗教的民族統合と、近代科学戦争を遂行するための科学技術の推進との矛盾を、国民学校創設の教育審議会での三国谷委員の発言を引用用し、その科学が精神教化に呑み込まれたとした。
- 「自然科学ノ本質カラ考ヘマシテ日本ノ教学ノ本質ト相容レナイモノガソコニ横タハッテ居ル」
- なお、ノモンハン事件で (1939) 石井隊は、国際法に反して、細菌、毒ガスを兵器として使用。
- 56 2000 年 6 月 7 日、舞鶴市で聞き取り調査。
- 57 「学校日誌」1943 年 6 月 19 日 (土)
- 「大楠公馬上像 発註 金六百十六円也送金 日本硬化石美術研究所」
- 58 野田三造「兵士」(西宮書院、1940)『昭和職業絵巻』に付けられた野田の解説文。図録「美術と戦争」姫路市立美術館 (2002) にも所収。
- 59 梅田は児童の絵の収集に際して、よく描けたものを替めて、もう 1 枚描いてもらい、最初の絵をもらったと「1 年生の図画」序文に書いている。はじめの絵のぼうがよい事も、示唆している。
- 60 前掲「尋常小学図教師用書 1 年生の特徴」参照
- 61 「教育ノ主義ハ専ラ人物ヲ養生スルニアリ」『其人物トハ何ソヤ、我帝國ニ必要ナル善良ナル臣民ヲイフ、其善良ノ臣民トハ何ソヤ、帝國臣民タルノ義務ヲ充分ニ尽ス者ヲイフ』(1887・11・15、森有礼の和歌山師範学校での演説)「教師タルモノハ教育ノ僧侶トモ云フベキモノニシテ一心不亂教育ヲ本尊トシ」『生涯教育ノ奴隷トナリテ尽力』すべきことを、訓示した。
- 森川輝紀「教育勅語への道」(三元社、1990)

(筆者 2002 年 9 月立命館大学文学部卒業)

(この論文は、立命館大学文学部史学科日本史専攻に 2001 年 12 月提出した卒業論文を、修正・加筆したものである。)